

訳者あとがき

本書はジャン＝フィリップ・トゥーサンの最新の小説 (*Fuir*, Les Editions de Minuit, 2005) の全訳である。

『浴室』(一九八五年、拙訳一九九〇年) から数えて、トゥーサンの小説作品としてはこれが七作目となる。『ムッシュー』(八六年)、『カメラ』(八九年)、『ためらい』(九一年)、『テレビジョン』(九七年) と続き、新しい世紀に入ってから書かれたのが『愛しあう』(〇二年)、そしてこの『逃げる』である。拙訳も順次刊行してきた。

二十年間の作家生活で出版された本が——エッセイ集『セルフポートレート (異国にて)』(二〇〇〇年) を入れても——全部で八冊とは、いかにも少ないと思われるかもしれない。うらやむべきマイペースぶりではある。しかしトゥーサンはその間、長編映画を三本撮っているし(『ムッシュー』、『カメラ』、『アイスリンク』)、また欧米各国や日本を始めとするアジア諸国にたびたび招かれて講演を行っている。訳者は彼

と知遇を得てから一五年以上になるけれど、夏のヴァカンスをのぞけば、いつでも意欲的に仕事に取り組んでいるという印象がある。しかもその仕事に対する評価は、近年いよいよ高まっている。初期の作品が日本で予想外に多くの読者を獲得したことで、もっぱら日本で有名な作家という目で見られた時期があったかもしれないが、最近の作品はフランスの読書界に素晴らしい反響を引き起こし、評論家たちの賞賛を集めている。最もポピュラーな事典の一つであるプチ・ラルース・イリュストレの新版に、「トゥーサン」が項目として採用されたのも、今や評価が定まったあかしだろう。

本書『逃げる』は、作家トゥーサンのそうした文学的キャリアのうえで、まさに決定的な一打となった傑作である。

たとえば刊行直後にル・モンド紙に掲載されたパトリック・ケシシアンによる書評など、こう締めくくられていたくらいだ——「文学にこれ以上の何を求めよう？」

あるいは、かつて『浴室』にいち早く賛辞を贈ってトゥーサンを世に送り出した作家ジャック・ピエール・アメットは、ル・ポワン紙の書評にこう書いている。「かたち、文体、厳密さ、句読法、心理——すべてが完璧だ」

さらには、文壇のご意見番であるベルナール・ピヴォも、「誰が為に携帯は鳴る？」とユーモラスに題した『ジュルナル・デュ・ディマンシュ』紙の書評で、次のように賛辞を述べた。

「いったいジャン・フィリップ・トゥーサンは、ファンタジーとロマンス、笑いとブルース、絶えざる運動とストップモーションを、どうやってかくも見事に溶け合わせる事ができたのかと問わずにはいられない」「何というストーリーテリングの才！ 生き生きとして、シンプルで、正確で、官能的で、効き目ある文体」

この本をめぐるはだれもがこういう調子で、賞賛の声一色という感じだった。とりわけアカデミー・ゴンクールメンバーであるピヴォの書評が出てからは、フランス最高の文学賞と目されるゴンクール賞の受賞も確実かと思われた。しかし結局そちらは、トゥーサンと同じベルギー人のベテラン作家、フランソワ・ウエイエルガンスに譲り、本書はメデイシス賞を授与された。過去の受賞者にソレルス、クロード・シモン、ペレックらを数える由緒ある賞である。

では、この小説のどこがそれほど賛辞に値するのか？ ここで訳者の意見を長々

と述べ立てることは控えたい。読者の皆さんには——とりわけ、いままでこの作家の小説を読んだことのない方々には——、とにかく作品そのものにあたって、ひととき、トゥーサンの語りに耳を傾けてみてほしい。親しみやすくやわらかい、明澄な声が聞こえてくるはずだから。

すでに著者と長いつきあいとなった者としては、一言だけ、トゥーサンの歩んできた道のりに対する感嘆の念を記しておくことにしよう。彼が登場した当時は、ミニマリズムとか、ポスト・モダンとかといった形容がつきまとった。写真的エクリチュール、映画的エクリチュールといった論じ方もよくなされたし、心理描写の乏しさや一人称のビジョンの狭小さがあげつらわれもした。『浴室』から二十年を経てこの新作を読むとき、そうした論点のいちいち、結局のところ射てはいなかったのではないかと感じられる。トゥーサンは彼にしか書けない小説を一步一步、地道に追い求めてきたのであり、自らの作品世界の充実だけをめざして、努力を重ねてきたのである。その結果として『逃げる』一卷がある。

思えば、浴室に閉じこもってしまふ青年の物語以来、トゥーサンの作品にとって

〈逃げる〉とは特別な意味をもつテーマだった。ぼくらは自分の生きている日々の流れから、たとえ束の間であれ、どうやったら逃げる事ができるのか。いささか逆説的にも、トゥーサンはそのテーマを正面に据えて、決してそこから逃げなかった。『逃げる』の驚くべきみずみずしさは、トゥーサンが選び取った主題が、いかに豊かなものを秘めていたかを示している。すべては文章の、文体の問題なのだと思わせると同時に、ここにまさしく、ぼくらの人生の現実があると痛切に思わせる。それだけの迫力を、この作品は備えている。

本書の刊行直後、トゥーサンは来日し、四十九回目の誕生日を——またしても——東京の友人たちに囲まれて祝う暇もあらばこそ、東京大学駒場キャンパスで「新しい小説から小説の未来へ」と題するシンポジウムに参加したり、アラン・ロブ・グリエについてのセミナーを開催したりと、活動的な日々を過ごす予定だ。今年、彼が生涯でもっとも影響を受けた作家だというサミュエル・ベケットの生誕百年にあたる。彼にとってベケットはどんな存在なのか、じっくり聞いてみたい。この小説で活写さ

れている上海や北京の印象についても訊ねてみたい。今秋、突如出版が決まったという新刊『ジダンの憂愁』——何というタイトルだ！——をおみやげにもってきてくれるのではないか、と期待しつつ、再会の日を待とうと思う。

二〇〇六年夏、ベルギー郊外のスネフ城にあるヨーロッパ文芸翻訳家コレージュに、本書の翻訳に取り組む各国の翻訳家たち（それに加え、すでに翻訳出版済みの中国人翻訳家）が集まって作者を囲み、二週間の合宿が行われた。討議の内容はインターネットのサイトに掲載され、残念ながら都合がつかず参加できなかった訳者にとって貴重な示唆を数々、与えてくれた。アドレスを記しておくので、関心のある読者はのぞいてみてほしい。<http://seneffe2006.jean-philippe-toussaint.de/>

いつもながら全般にわたって、集英社翻訳書編集部の岩本暢人さんを始めとする皆さんの有難いサポートを得たことを記して感謝する。

二〇〇六年一〇月

野崎 欽